

# ふくいミュージアム

平成26年度特別展

2014.3.14 No. 48

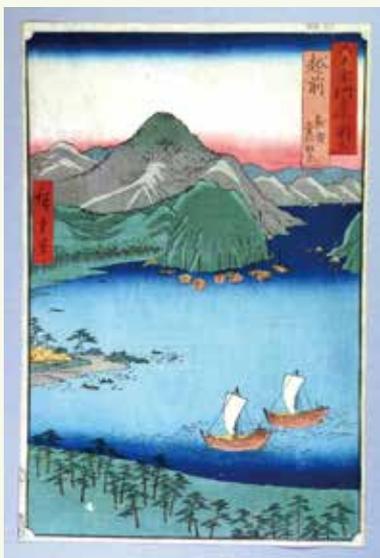
## 敦賀湊と三国湊

全国的な商品流通網が発達した江戸時代、越前には敦賀湊と三国湊という、日本海沿岸を代表する二つの湊町がありました。敦賀湊は、北陸地方から京阪地方へ向かう玄関口に位置するという地理的な好条件から、北陸地方と京阪地方を結ぶ中継港として栄えました。一方、越前の最大の河川である九頭竜川の河口にあった三国湊は、福井藩など越前の城下町の外港として発展し、年貢米を中心に多くの物資がここから積み出されました。そして、西廻り航路の整備や北前船の活動は、両湊町の歴史に大きな影響を与えました。

本展では、江戸時代の敦賀湊・三国湊にゆかりある歴史資料を展示し、その繁栄ぶりとともに、両湊町の特色やそこで育まれた文化を見ていきます。ここで、その概要を紹介しましょう。

### 一、湊町のにぎわい

最初のコーナーでは、江戸時代の敦賀湊・三国湊のにぎわいのようすを、浮世草子や浮世絵などの絵画資料をもとに紹介します。



六十余州名所図会 越前敦賀気比ノ松原  
(初代歌川広重) 当館蔵

元禄期(1688~1703)から大坂を中心に流行した浮世草子では、井原西鶴の『日本永代蔵』や北条団水(西鶴の弟子)の『日本新永代蔵』などで、敦賀湊が舞台として登場しています。諸国からの入船が多く、問屋が軒を並べる「北国の都」とされた盛況ぶりは、当時の上方によく知られていたようです。

浮世絵では、名所絵の揃物(シリーズ物)で、歌川広重などが敦賀湊・三国湊を描いています。多くの廻船が停泊する敦賀湊・三国湊のにぎわいは、越前の名所として全国に紹介され、広まっていました。

また、地元にも見応えある風景図が伝わっており、活気に満ちた両湊町のようすを感じ取ることができます。

### 二、湊町のかたち

つづいて、町絵図や地誌などの資料から、江戸時代の敦賀湊・三国湊の町方がどのように形成されてきたのかを比較しながら見ていきます。



越前三国湊風景之図(部分) みくに龍翔館蔵

敦賀の町方は、<sup>しょう</sup> 筥の川と<sup>こやの</sup> 兎屋川によって川中・川西・川東(川向)の三つに区分されました。中世からの町方があった川中の中心部から次第に町域が拡大し、ほぼ寛文期(1661～72)頃までに江戸時代の敦賀湊の町なみができあがりました。

一方、三国の町方は、台地の上下によって下町と上新町に分けられます。下町が中世からの町方で、18世紀前半まで町域が川下に向かって徐々に延長していきました。また、万治2年(1659)から台地上の開発が進んで上新町の町なみができあがり、その後も拡大を続けました。

このように、どちらも江戸時代に入って町方が広がっていくわけですが、その発展のしかたには歴史的な背景による違いがありました。

### 三、湊町の発展

上方と北国との間を結ぶ中継商業都市としてにぎわった敦賀湊でしたが、北国の荷物を海路で直接大坂へと積み送る西廻海運が確立すると、18世紀には商品流通の結節点としての地位は後退しました。

これに対し、越前諸藩の物資の集散地だった三国湊

では、西廻海運の発達によりさらに活況を呈し、内田家のように廻船業で福井藩を代表する豪商に成長する者が現れました。そして、敦賀湊でも江戸時代中期以降、北前船主として廻船業に進出した商人たちが財力を築きました。

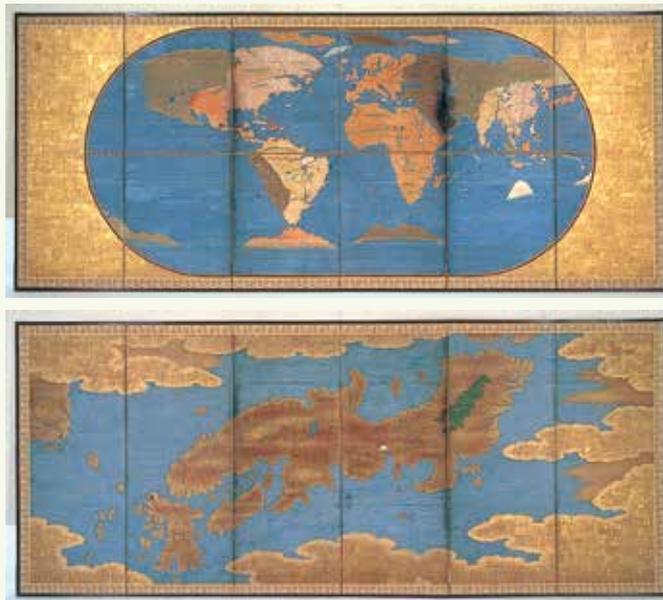
本コーナーでは、こうしたダイナミックな社会の変化の中で、敦賀湊・三国湊それぞれの特色や両湊町が果たした役割をさまざまな資料から紹介します。

### 四、湊町の文化

湊町に集まる人びとの遊興の地として、敦賀湊では川東の天満宮(現在の天満神社)近辺に、三国湊では上新町<sup>ごずてんのうしや</sup>の牛頭天王社(現在の氷川神社)<sup>ひかわ</sup>近辺に、遊廓が置かれて繁昌しました。

三国湊に隣接した<sup>ただにでもら</sup>滝谷出村にも遊廓が形成されましたが、滝谷出村の遊女<sup>かせん</sup>から歌川という俳人が登場します。歌川はのちに「近世畸人伝」という書物で全国に紹介されました。また、敦賀湊では江戸時代後期、狂歌師<sup>かき</sup>の柿谷半月<sup>たにはんげつ</sup>が活躍し、「敦賀風景八ツ乃詠<sup>のうた</sup>」などの秀作を残しています。

遊女・歌川をはじめとして、江戸時代の両湊町で花開いた文化の諸相に迫ります。



世界及日本図 六曲屏風 福井市浄得寺蔵 (国指定重要文化財)

特別展

## 敦賀湊と三国湊

開催期間 平成26年7月18日(金)～8月31日(日)

観覧料 一般 400円 大学・高校生300円 小中学生・70歳以上の方200円 ※30名以上の団体は2割引

# 敦賀市沓見出土の初期須恵器の一例

当館への寄贈資料の1つとして、敦賀市沓見出土と伝えられている須恵器のはら甕があります。

須恵器には、蓋坏、高坏、器台、壺や甕、そのほか様々な種類の形がありますが、甕は小型壺の胴部に穴を開け、その穴に竹などで作った管を差し込み、液体を注ぐのに使用したものです。

須恵器は、古墳時代の5世紀前半に朝鮮半島から伝えられた技術により作られた焼き物で、山の斜面を利用して構築された登り窯で焼かれた、灰色をした陶器です。須恵器を作る技術は、回転するロクロを操り、焼成の段階では約千数百度の火をコントロールしなければならないという、今で言うならば最先端のハイテク技術であり、そうした技術を持った専門の職人集団が作っていました。そのため、日本で最初に須恵器を作ることができたのは、朝鮮半島からの技術導入ができ、また、そうした専門集団を維持することができる強大な勢力を持った北部九州の豪族や、畿内政権でした。

今回紹介する甕の大きさは、高さ16.8cm、最大径15.8cm、口径12.5cmを測り、注口部の直径は1.4cmを測ります。甕は、器形や大きさにより、大型、小型、樽型に大別されますが、本資料は大型に属するものです。

製作技法は、粘土紐巻上げ後のロクロ成形後に、外部外面下半～底部外面にかけて格子目状の叩き板による叩き調整を行い、他は強い回転ナデ調整を行っています。

器面全体の色調が青灰色を呈しているほか、口縁部の割れ口断面がセピア色を呈していることから、良好な焼成状態であったことがわかります。また、頸部内面と肩部外面には、濃い緑色を呈した自然釉が斑点状に認められます。

これらの特徴を持つ本資料を須恵器の一大生産地であった大阪・陶邑古窯址群における編年に位置付けると、TK208号窯式のものとすることができます。TK208号窯式は、初期須恵器と言う、日本で須恵器生産が開始されて間もない段階のもので、5世紀後半代に位置付けられています。初期須恵器の段階に含まれる須恵器の福井県での出土例は少なく、この時代の須恵器が地方では貴重品であったことがわかります。

その福井県で少ない出土例の中でも、数量的にまとまりが認められるのが敦賀地域であり、とくに敦賀平野東

端に位置する向出山1号墳からは、坏1点、有蓋高坏3点、壺3点、同2号墳からは壺1点、甕2点の初期須恵器が出土しています。向出山古墳群は、敦賀における5世紀後半代の首長墓であることから、畿内政権と強く結びついていた向出山の被葬者が、これらの初期須恵器を入手し得たものと思われます。

上記の向出山古墳に対し、本資料の出土した敦賀市沓見は敦賀平野の西端にあたり、付近の古墳時代遺跡には、向出山古墳群に匹敵しうる有力な古墳が見られず、集落遺跡を思わせる数か所の遺物散布地が認められるにすぎません。そのような環境の場所において、完形に近い初期須恵器が出土していることは大変な驚きです。

今回紹介した甕は、出土場所、出土状況とも不明な点が多く、第一級の資料とは言い難いものの、敦賀全体の古墳時代史を語る上には貴重な一資料であると言えます。

(水村伸行)



遺跡位置図



敦賀市沓見出土の初期須恵器

## 天目茶碗

[法 量] 口径12.2cm 高さ6.8cm 高台径4.6cm

[時 代] 南宋～元時代

[箱蓋墨書銘] 〈表〉古瀬戸／銀縁天目盃／宗哲ぬ里(塗り)／黒天目基  
〈裏〉明治丙午夏／造／包容菴／八十一歳不翁 花押

遺跡から出土する土器の多くは割れた破片でみつかることから、土器本来の形を観覧者に伝えるため、当館では一乗谷朝倉氏遺跡等の出土品理解の参考になる資料も収集しています。ここに紹介する「天目茶碗」もこのような位置づけですが、天目茶碗の特色をよく表す優れた資料です。

天目茶碗は、抹茶が普及した中国宋時代に作られ、黒釉と口縁がすばまる朝顔形が特色です。なお「天目」は日本での呼称で、中国では「盞」と呼ばれました。唐物(中国製品)では福建省建窯産がもっとも有名です。

## 資料の概要

形状は椀形で口縁がすばまるいわゆる天目形です。体部には強いロクロ目を残し、腰部分は整形削りの飛びカンナ痕を残します。高台は段をつけ削り出し、畳付(接地面)を斜めに面取りします。高台内は回転させ浅く削ります(深さ0.1cm)。口縁部には銀製の覆輪を掛けます。覆輪下に4か所の欠けがあります。内面見込みは直径5.2cmを測り、体部から1段下げて深く彫り込みます。器壁は全体に薄手です。

胎土は白色に近い明灰色でややザラつきがありますが、ねっとりとした感覚で砂粒はみられません。

釉薬は高台付近を露胎とし、柿色を呈する鉄釉、さらに上から黒色の鉄釉を2重に掛けます。腰部分の釉垂れが景色をつくります。

付属品として真塗(全面黒漆塗)の天目台が添います。また、箱蓋墨書銘から明治39年(1906)に箱がつくられたことがわかりますが、それ以前の伝来は不明です。

## 資料の特色

口縁が水平でなく歪んでおり、ロクロ目が明確で高台の削り出し等に荒い作りがみえます。しかし、器壁が薄いこと、見込みの深い削り、腰部の飛びカンナ痕、二重掛けの釉薬等、16世紀頃の瀬戸美濃(日本)製の天目茶碗との様々な相違点から、本品はいわゆる唐物(中国製)天目茶碗のうち、「灰被天目茶碗」とみられます。

天目茶碗といえば、曜変・油滴等建盞系や、吉州窯系の玳皮盞等のような美しい釉薬に身を包み、器形が整ったものを思い浮かべられるでしょう。室町幕府の美術品評価書ともいえる『君台観左右帳記』には建盞系のもを高く扱い、灰被天目系の碗は「上には御用なき物にて候間、不及代候也」と低い評価でした。しかし千利休の師・武野紹鴎の頃、わびた茶の湯にふさわしい天目茶碗としてその価値は上昇しました。本品をみると、「名物」とされた灰被天目と比べ釉調に変化が少ないものの、口縁部の細かく長く流れる柿色の釉や、わずかに透明性をもつ厚い黒釉が、晩秋の夜長を思わせる深さを湛えています。また、一見荒い造形も、実は丁寧肉をそぎ落とし、薄く・軽く仕上げられており、高い技術力を感じさせます。唐物写しにしのぎを削る瀬戸美濃窯では16世紀には唐物に迫る天目茶碗を作る技術向上を見せますが、唐物の細やかな配慮には及びません。

近年福井県下では室町時代の城館や寺院遺跡の調査報告が相次いでいます。このような遺跡では、権威の象徴として必ず天目茶碗が出土します。そのほとんどが瀬戸美濃製で、本品のような唐物が出土する遺跡はまれと言えるでしょう。中世人が渴望し、掌中の珠と大切にした唐物天目茶碗。本品をみていると、当時の人々のあこがれの吐息が聞こえるようです。(河村健史)



## 昭和十五年度 満洲建設勤労奉仕隊手帳

[法 量] 12.5×7.0(cm)

[時 代] 昭和15年(1940)

平成17年(2005)に寄贈された資料で、昭和15年度の「満洲建設勤労奉仕隊」の隊員に支給された手帳です。本文は80ページ、巻頭の14ページにわたって「天壤無窮の神勅」「五箇条ノ御誓文」などが印刷され、後半の約60ページに旅程表や日記が書き込めるようになっています。手帳の持ち主は、隊に小隊長として参加した人物(T氏とします)です。T氏は大正5年(1916)生まれの当時24歳、福井県農会に所属する技師でした。

この「奉仕隊」は、「満洲(現在の中国東北部)」の開拓と食料増産などを目的に昭和14年に「興亜建設勤労奉仕隊」として始められ、15年度に「満洲建設勤労奉仕隊」に改められました。長期・短期の2種があり、長期の隊には「特設農場班」「開拓国境建設班」が設けられました。この手帳の「奉仕隊」は「特設農場班」で、農地開拓がおもな役割とされました。組織は軍隊にならい、県別に小隊が組まれ、4小隊で1中隊となります。活動期間は種まきから収穫までの6か月間(5~10月)で、前・後期の3か月間にそれぞれ2つの中隊が派遣されました。本資料に記載された昭和15年度後期には、福井県から28名が参加し、新潟県・富山県・石川県の小隊とともに「薩爾図特設農場(注1)」で活動しました。

手帳の記述から、その具体的な日程や活動内容を知ることができます。旅程表によれば、奉仕隊は7月5日に福井を発ち、翌6日に茨城県水戸市赤塚に着き、河和田訓練所(注2)に入所しています。ここで14日まで訓練を受け、15日に東京経由で神戸港へ向かい、16日に出港し

ました。その後、19日に大連港に着き、旅順の戦跡見学の後、22日に目的地・薩爾図に着きました。

本格的な作業は7月24日に始められました。手帳によれば、おもな作業は「土塁の構築」「道路の建設」「農作業」でした。とくに「土塁の構築」と「道路の建設」は、手帳でも「特設農場当面ノ基本的二大事業」とされ、期間中16日間があてられています。農作業については、周辺の土壌がアルカリ性のため飼料増産に重点が置かれ、「草刈り」が14日間も行われました。なお、白菜や大豆などの農作物に関する記述は4日間のみです。

また、T氏は小隊長であったことから、手帳には隊員の状態や周囲の状況も記録されています。公休日が少なく隊員の疲労が募るようす、体調不良や士気の低下、宿舎の雨漏りなどです。8月18日には旧盆ということで作業を休み、演芸大会が開かれました。「唄二踊ノ爆笑裡二次タトプログラムハ展開」とあります。

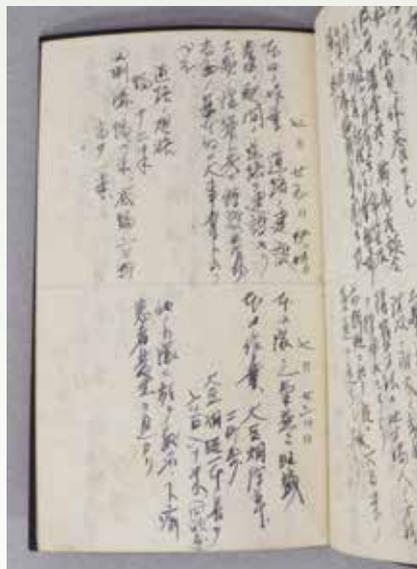
さらには、現地の不穏な情勢がうかがえる記述も見えます。8月27日には予告なしに夜間の非常呼集・警戒演習が実施され、9月24日には近隣で銃声が鳴り、全員が待機状態で夜を明かしています。

その後、奉仕隊は9月27日に薩爾図を出発、10月3日に福井に帰着し、3か月間の奉仕が終了しました。

昭和15年度「満洲建設勤労奉仕隊」については、後に公式報告書が作成されました。いっぽうで、当事者の記録が目に触れる機会はあまりありません。小さな手帳ですが、生の声を伝える貴重な資料です。(瓜生由起)



「満洲建設勤労奉仕隊手帳」表紙



「満洲建設勤労奉仕隊手帳」7月25日・26日

注1:「薩爾図」は「サルト」と読む。現在の大慶市(中国黒竜江省西南部、ハルビン市とチチハル市の中間)にあたる。

注2:河和田訓練所は、「満蒙開拓青少年義勇軍」訓練所であった内原訓練所の分所で、奉仕隊の訓練が行われていた。

# 大湊神社のお獅子様祭り

祭りに獅子頭を用いる例は、県内外に限らず、広く分布しています。獅子頭とは「獅子舞」などで使われる、獅子を象った、主に木製の面の一種です。獅子頭のモデルとなったものはライオンや虎などの実在の動物や、麒麟などの架空の動物など、様々な要素が加わっているようです。

県内では、県指定無形民俗文化財を例にとりますと、丹生郡越前町八田の獅子舞、南条郡南越前町八飯の獅子舞、敦賀市赤崎の獅子舞、小浜市の雲浜獅子、大飯郡おおい町名田庄の下村の獅子舞で獅子頭が用いられます。このほかにも、県内各地の祭りで多く見られます。

獅子頭の多くは、例に挙げたような「獅子舞」に用いられます。しかし、「舞わない獅子頭」も存在します。どちらにしても、特に魔を払う意味を持たされていることがあります。

今回は、その舞わない獅子頭の中でも他に例が無いとみられる、坂井市三国町安島の大湊神社を中心に行われる「お獅子様祭り」について、取り上げます。

## 13の集落を巡る「お獅子様祭り」

坂井市三国町安島の大湊神社といえば、現在では4月20日にある、乙女神輿などが出る雄島祭が有名ですが、その大湊神社のもう一つの神幸祭が「お獅子様祭り」です。この祭りでは、獅子頭を中心にした行列が集落を巡ります。一つの集落の祭りではなく、安島を始め、崎や梶などの13の集落を巡るのです。

行列には太鼓、大湊神社の神額、獅子頭を載せた神輿、そして、その神輿と天狗面を載せた台車、神主、幟旗や幡と並びます。

行列のメインとなる獅子頭は「オシシサマ」や「オシッチサマ」などと呼ばれています。祭りのときには、獅子頭は神輿に

載せられ、御神体、つまり「神様」として扱われます。この獅子頭を使って舞うようなことはありません。かつては神輿を担いで巡っていたのですが、現在は専用の台車に載せられています。台車に載せるにあたって、神輿下部は切り取られ、神社に保管されています。また、現在では、獅子頭同様に台車に載せられる天狗面も、かつては別に運ばれていました。獅子頭と天狗面の製作年代については、獅子頭が室町時代、天狗面は室町時代から江戸時代前期ではないかと考えられています。獅子頭を載せる神輿は安政3年(1856)の製作で、当時、三国で活躍した島派の彫刻師である、志摩吉右衛門義時らによって作られたものです。

## 祭りの日

祭りの日程は、毎年3月19日から21日にかけてとなっており、平成25年もこの期間にかけて行われました。ここでは平成25年の記録をもとに、近年の祭りの様子を述べます。

19日は安島区内を巡ります。大湊神社を出て、途中、氏子総代の家などに寄るなどして、安島区内全域を巡り、大湊神社に戻ります。途中で寄る家は決まっていますが、前年の祭りから、その年の祭りの間に、その家に死者が出ると寄りません。

20日は、大湊神社を出発し、崎、梶、浜地、平山、西谷、嵩へと巡ります。神社を出発後、安島では一軒の家に寄ります。家の中に神輿を入れ、祝詞を上げるなどします。また、この時、行列の人びとにはお酒などが振る舞われます。その後、安島から崎へ向かい、崎では日吉神社に停まります。神社へ着くと、安島から来ていた行列の人びとは神輿や幟などの行列に関わるものを崎の人びとへ渡すと、神主と氏子総代を残し、安島の人びとは速やかに帰ります。神輿は崎



お獅子様の行列



神輿に載せられた獅子頭

の人びとによって、拝殿内へ運ばれ、祝詞の奏上などが行われます。その後、日吉神社を出発し、崎では集落内を巡ることはせず、梶の貴船神社へと向かいます。安島から崎へと来た時と同じように、貴船神社に着いた時点で、崎の人びとは帰っていきます。そして、また神社での祝詞の奏上などが済むと、梶の人びとによって、浜地へと巡ります。このようにリレーのバトンのように獅子頭や天狗面などを次の集落の人びとへと渡すと、前の集落の人びとは帰っていきます。

各集落では神社に行く場合と、個人宅に行く場合があります。個人宅の場合は、その地区の氏子総代などの家となります。個人宅の場合でも、そこで祝詞をあげるなどします。20日は嵩の湊別神社を最後とし、20日はそこに泊まることとなります。

翌21日は嵩を出発し、覚善、瀧谷、宿、米ヶ脇、陣ヶ岡、東尋坊と巡り、安島の大湊神社へと帰ります。この日も前日と同じく、リレーのように獅子頭などを渡していきます。多くの集落では、この時に集落の神社の春の祭りも執り行うことが多いようです。

## 祭りをめぐる伝承

獅子頭の載った神輿の下をくぐるとその一年は健康であるといわれています。かつては非常に多くの人がかぐろうとして、行列が先へと進めなかったとも言われています。

この神輿は、安島から浜地にかけては女性が担ぐものと言われており、参加した女性は「出産が軽くなる」ともいわれています。しかし、『修訂三国町史』によると明治中期まで神輿を担ぐのは男性に限られ、明治以降、海外との貿易などで船員として土地を離れているものが多く、男性による維持が困難になり、女性も参加することになったとされています。しかし、現在では神輿は台車に載せることとなり、台車の曳き手も多くは男性が務めています。

## お獅子様祭りの特徴

このお獅子様祭りには次のような特徴が挙げられます。

- ・大湊神社の社領(神事などの費用をまかなうための神社の

領地)であったとされる13の集落を巡行すること。

- ・行列が各集落の人びとにより、リレーのような形で巡行すること。
- ・獅子頭そのものが御神体とされ、神輿に載せられていること。
- ・行列の中心が女性となっている集落があること。

これらの特徴については、お獅子様祭りがどういった性格のものかを考える上で、いくつか検討の必要があります。

広い地域を巡る獅子頭については、現行での県内最大規模と考えられるものは越前町織田の劔神社のものです。劔神社では、かつての社領であったといわれる53の集落を巡ります。この祭りは、豊作が3年続いた年などに行われるもので、最近では平成20年(2008年)に行われています。ただ、劔神社ではリレーのような形ではありません。獅子頭の巡行でこのような形で行われるのは、管見では他に例が見られないようです。

獅子頭そのものが御神体という扱われ方について、他に例が無い訳ではありません。獅子頭が巡行することは、即ち、神そのものの巡行といえます。しかし、この祭りの位置付けは、大湊神社の年中行事全体を含めて、考える必要がありそうです。

先に記述したように、明治中期に女性が祭りの中心として、参加するものとなったといわれています。この時期に女性が参加することを容認した例は少ないのではと考えられます。また、女性が参加することにより、それに伴う、伝承の変化の可能性もあります。例えば「参加した女性の出産が軽くなる」といったことは、かつてはなかったのではないかと考えられます。このようなことが、他にもあるかもしれません。

この大湊神社のお獅子様祭りは、これまで考えられてきた、福井県の獅子頭を用いた祭りや行事の中では、特に独自性の強いものと考えられます。福井県における獅子頭をめぐる祭りのあり方について、また、祭りそのものを考える上でも新たな視点が得られるかもしれません。これからも調査、研究を続けていく必要があります。(川波久志)



個人宅での祝詞奉上



神輿をくぐる

10月

- 1日(火)  
長浜市曳山博物館来館(資料貸出)
- 12日(土)  
やさしい古文書講座  
「戦国武将の古文書を読もう!  
—橘家文書より—」第1回(研修室)
- 18日(金)  
みくに龍翔館来館(資料貸出)
- 19日(土)～12月1日(日)  
特別展「染付—戦国大名が愛した  
魅惑のうつわ—」(特別展示室)  
写真展「染付のふるさと  
—中国江西省 景德鎮の情景—」  
(エントランスギャラリー)
- 20日(日)  
「染付尽くしのお茶会」(エントランスロビー)
- 23日(水)  
体験教室「染付の絵付けにチャレンジ!」(研修室)

11月

- 7日(木)～8日(金)  
全国博物館大会参加(岐阜県岐阜市)
- 9日(土)  
キッズミュージアム  
「わりばしライフルを作ろう!」(研修室)
- 10日(日)  
バスツアー「越前・近江 戦国合戦の地をたずねて」
- 16日(土)  
ふくい歴博講座「染付」(研修室)
- 20日(水)  
東京文化財研究所来館(資料調査)
- 23日(土)  
やさしい古文書講座  
「戦国武将の古文書を読もう!  
—橘家文書より—」第2回(研修室)
- 29日(金)～12月8日(日)  
体験教室「染付の絵付けにチャレンジ!」作品展示



体験教室「染付の絵付けにチャレンジ!」

12月

- 5日(木)～24日(火)  
写真展「ラジオの時代」(エントランスギャラリー)
- 14日(土)  
やさしい古文書講座  
「戦国武将の古文書を読もう!  
—橘家文書より—」第3回(研修室)
- 15日(日)  
キッズミュージアム「鉱石ラジオを作ろう!」(研修室)
- 17日(火)  
福井県立若狭歴史民俗資料館来館(資料調査)
- 26日(木)～1月21日(火)  
写真展「ウマすぎ!? 午年の年賀状」  
(エントランスギャラリー)
- 29日(日)～1月2日(木)  
年末年始のため休館

1月

- 3日(金)～2月23日(日)  
新春特別企画「干支の午」(特別展示室)  
「冬休み! 歴博クイズラリー」
- 11日(土)  
やさしい古文書講座  
「戦国武将の古文書を読もう!  
—橘家文書より—」第4回(研修室)
- 12日(日)  
「新春のお茶会」(エントランスロビー)
- 19日(日)  
キッズミュージアム「干支の絵馬を描こう!」(研修室)
- 23日(木)～3月2日(日)  
写真展「38豪雪の記録」(エントランスギャラリー)
- 25日(土)  
ふくい歴博講座「越前の小型狒犬」(研修室)
- 31日(金)  
北名古屋歴史民俗資料館来館(資料貸出)

2月

- 24日(月)  
国立歴史民俗博物館来館(資料貸出)  
福井県立若狭歴史民俗資料館来館(資料貸出)